

「鳥追い」の歴史をひも解いて

湯沢町の歴史・民俗に詳しい

高橋 正明さんにお話を伺いました

「鳥追い」の歴史と意義は？

「鳥追い」の歴史は古く、少なくとも江戸時代中期には始まり18世紀後半（江戸時代後期）には広く行われていたと考えられています。江戸時代の雪国の暮らしを紹介した鈴木牧之の『北越雪譜』の中にもその様子が記されています。

「鳥追い」は、基本的には春から始まる稲作が上手くいくことを祈る予祝行事です。また、子どもたちが中心になって行事を行うことで、「子どもたちが村の一員としての役割を果たす」という意義もあります。

賽の神やどんど焼きとの違いは？

本来、「鳥追い」と「賽の神」とは全く違う行事です。しかし、二つの行事を二日続けて行う場合が多く、それが段々と一つにまとまっていきました。

「賽の神」は、全国的にも「どんど焼き」や「道祖神祭り」等の名前で沢山行われれています。詳細は割愛しますが、「賽の神」は村境を「塞ぐ」ことで、災いや疫病

が村の中に侵入することを防ぎ、無病息災や五穀豊穡等を祈る祭りです。また、一年間家を守ってくれた「歳神様」を天にお送りするために松飾りやしめ縄を燃やすことも行われました。

「鳥追い」が稲作に特化した祭りであるのに対し、「賽の神」は五穀豊穡や無病息災を祈るところに大きな違いがあります。

「鳥追い」を行っている地域と行っていない地域があるのはなぜ？

明治維新を迎え、文明開化により日本を「近代な」国家にするために明治政府は、それまでの因習や迷信的な習慣を禁ずる通達を数多く出しました（マゲの禁止等）。その流れの中で現在の大字土樽にあたる地域の村々は「鳥追い」を廃止していったのだと思います。大字湯沢地域の村々も廃止したかもしれませんが、明治10年代以降、日本的な習俗を見直す動きとともにそういった通達が緩み復活させたのかもしれない。前述の『北越雪譜』の作者鈴木牧之の故郷である旧塩沢村では「鳥追い」を廃止し現在も行われていません。

また、旧三俣村と旧三国村（二居・浅貝）では稲作が行えませんが（一時、三俣村で行ったことがあります）。「鳥追い」は米の豊作を祈る祭りですのでこれらの地域では「鳥追い」は行われませんでした。現在、大字三俣では「しめ焼き」を行っています。これは前述のように「賽の神」の一つで歳神様をお送りする行事です。

「鳥追い唄」の歌詞にはどんな意味がある？

あの鳥とりやどっから追ってきた

信濃の国から追ってきた

何持って追ってきた 柴持って追ってきた

柴の鳥も川の鳥も 立ちやがりや ホーイホーイ

おらが背戸の 早稲田の稲に 何鳥なにどりとまった

スズメ スワドリ 立ちやがりや ホーイホーイ

西から東へ飛ぶ鳥は 羽が十六身は一つ

ホンヤラホンヤラ ホーイホーイ

単純に歌詞を解説すると、「あの鳥はどこから追ってきた。信濃国から追ってきた山の鳥も川の鳥も早く去れ」。何を追ってきたか、それは害虫です。信濃の国の人に追われてきたとも解釈できます。柴は焚き付けにする小木で里山の象徴です。「家の裏の早植えの稲にスズメや諏訪から来た鳥が止まった。早く去れ。（西に位置する）信濃から越後に鳥が飛んでくる」。鳥追いを行う旧暦正月14日は満月の頃です。十六は月の十六夜。季節の情景を描いています。沢山の災いとも解釈できます。夜の行事であることも示唆されています。

この先は私見になりますがお話しします。

魚沼地方はかなり以前から、信濃国（現在の長野県）と人的・文化的交流がありました。信濃国の諏訪大社が魚沼各地に勧請され、旧湯沢村の村社も湯元の諏訪神社ですし、旧神立村の戸沢には「おすわさま」という祠もあります。

上流の信濃の国との繋がりが基本にあり、信濃国から追って来た鳥とは米を食い荒らす害鳥、害虫だけでなく、災い、疫病など村にとっては厄介なものをも象徴し、それをすぐ追いかけておおうとする囃子歌が「鳥追い」の歌なのではないでしょうか。「鳥追い」を子ども主体の祭りにしたのは、村の一員としての成長を願うあらわれです。



高橋 正明さん

長年、エコツアーガイドや公民館講座の講師を務められてきた高橋さん。80歳となられた現在は、映像とエッセイを組み合わせた動画制作を行うなど、新たな挑戦をYouTube上で試みられています。